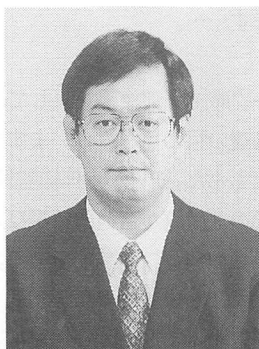


監督回顧録

冬来たりなば

横山 博行



冒頭から私事にわたり恐縮だが、平成6年4月1日から2年間、勤務先である学校法人関西大学の業務の関係で大阪を離れ（「私大連」への出向勤務のため）、関東の地で生活することになった。その間、リーグ戦その他の試合に顔を出すこともなく、関西大学レスリング部との関係は一時途切れたようなかたちになった。

平成8年3月末に大阪へ戻ることとなった。何はともあれ、やはりレスリング部のことが気になり、4月1日の入学式の日に現役部員のもとへ足を運んだ。大学では新入生を迎えるオリエンテーションの時期であり、各クラブやサークルなどが新しい仲間を獲得しようと懸命に勧誘活動を行っていた。レスリング部もまたしかりである。現役部員はみな初めて見る顔ばかりであった。聞いてみると、4回生はおらず、3回生が2名、2回生が4名（うち女子部員1名、女子マネージャー1名）、1回生は当然のことながらこれから勧誘しなければならない。ここ数年そうであったようだが、「（部員数が）少なくなったなあ……」というのが、正直な感想であった。

4月の第1日曜日、関西大学校友会の定例行事の際、レスリング部OBの会合があり、出席OBとともに現役部員の練習を見学した。私自身は久しぶりに目にする練習であったが、やはり部員数

の少なさが印象に残った。練習している部員よりも、それを見学しているOBの数のほうが多いのである。当日のOBの会合において、伴先生から平成8年度以降の現役指導の新体制案についてお話があった。総監督は引き続き伴先生が担当され、長年にわたりご苦勞をいただいた藤田監督に代わり小生が監督に就任、新たに安田先生がコーチに就任するという内容であった。

藤田監督は、就任された昭和56年度以降、ほとんど毎日のように現役の練習指導に当たっておられた。自営業でたいへんななかを、懸命に時間のやりくりをしてくださっていた。伴総監督もまた公務などで多忙ななか、時間を見つけては現役の指導に当たってくださり、時には自ら新入部員の獲得までしていただいた。伴総監督の指導力と藤田監督の努力により、高校時代のレスリング経験者がほとんどいない素人集団が力をつけた。スポーツ推薦で、ある面で容易に部員獲得をなすうる大学を相手に1部リーグで、悪くても2部リーグの上位で戦うことができたのである。

さて私自身のことだが、監督就任については迷いに迷った。仕事から平日はほとんど練習指導に当たることが困難である、というのがその最大の理由であった。チーム力がある程度の高いレベルに達したならば、指導者が毎日顔を出さずとも、部員だけでそれなりの練習をすることもできよう。この時点で関西大学レスリング部はそのレベルには達していない。実質的なことは何もできず、名目だけの監督になってしまうのではないかとの不安が大きかった。一方で大恩のある関西大学レ

スリング部に、何らかのかたちで恩返しをしたいという思いもあった。

私自身の学生生活を振り返ってみても、善きにつけ悪しきにつけ、レスリング部抜きに語ることはできない。卒業して15年以上が経過した現在でも、当時の伴監督、藤田コーチ、その他の数多くのOB諸兄や先輩から受けたご指導、叱咤激励、罵詈雑言などなどが、とても懐かしく思い出される。「関西大学で4年間レスリングをやってよかった」の思いを懐く者は、OBのなかで私だけではないであろう。現在レスリングをやっている者に、そしてこれからレスリングをやろうとする者に、そのことを伝えたいという思いで、非才をかえりみずに監督就任を引き受けた次第である。

新体制で臨んだ平成8年の春季リーグ戦の結果は、2部リーグ5位であった。大会前はチーム力の現状からすると最下位も予想されたが、部員の頑張り、新規加盟大学の戦力が整っていないことにも助けられて、最悪の事態は免れた。

夏には「全日本学生レスリング女子選手権大会・特別大会」において、我がレスリング部創部以来初の女子選手である岸本裕子が健闘し、3位入賞を果たした。全国レベルの大会での上位入賞は本当に久しぶりのことである。彼女の場合、他に女子選手がいないため、日常の練習は男子部員とせざるを得ない。そのハンディを乗り越え、地道な努力が実を結んだといえよう。

新入部員も1回生が4名入部し、2部リーグ上位進出を狙った秋季リーグ戦は、1回生の活躍があったものの、春季と同じ5位にとどまった。2部リーグにおいても、スポーツ推薦などで選手を獲得する大学が大半をしめており、上位に進出するためにはさらなる努力を必要とすることを再認識させられた。

久々に1回生が4名入部するという明るい話題のもと、平成9年度に臨もうとしたところ、愕然とさせられることが起こった。新3回生の1名、新2回生の2名が突如退部したのである。理由は

各人各様であったが、ショックであった。現役部員はもちろん、安田コーチも説得に当たったが、翻意させることはできなかった。

少ない部員の大半が怪我人という最悪の状態平成9年度の春季リーグ戦に臨まなければならなくなった。新ルールに基づき、前年までの9階級から8階級の対抗戦となったが、フル・エントリーすらできない。結果は2部リーグで7位。関西大学レスリング部史上初の最下位である。

いまから20年近く前、私自身の現役時代、入替え戦に敗れ、1部リーグから2部リーグへの降格が決まったとき、悔しさと、申し訳なさで、涙が流れて止まらなかったことを思い出した。立命館大学に敗れて最下位が決定したとき、何名かの部員が目に戻すのではと思ったが、現実は違った。試合後のミーティングの際に、思わず声を大にして選手たちに問うたことを憶えている。

「最下位だ！今回参加した西日本の大学で一番弱いんだ！悔しいと思う者は手を挙げてみる！」

すべての選手が手を挙げたことが救いであった。その気持ちさえ忘れなければ、きっとやれる。

私自身の現役当時とは異なり、加盟大学数も増えた。スポーツ推薦による選手獲得は当たり前のような状態になった。他大学の選手のなかには、高校時代の経験者はもちろん、小学生のころにレスリングを始めた者もいるのである。それらの大学に、関西大学レスリング部が伍していくことは容易なことではない。

まずは部員数であろう。平成9年度の関西大学の志願者数は8万6千名を超え、入学者数は6千5百名を超える。そのなかでレスリング部に入部した者はわずかに1名である。部員数さえ増えれば、現状に甘んじるようなことは決してない。あとは、努力あるのみ。

レスリングはしんどいスポーツである。マイナーで脚光を浴びることの少ないスポーツである。練習をすればするほど、「耳」がつぶれる。（なかには顔までつぶれたのではないかと思われる

る人もある。) いかつい身体になる。(男性の場合、よほどの例外を除いて) 女性にもてるということは、まずあきらめたほうがよい。苦しい減量もある。時には怪我をもする。それでも4年間を頑張ったならば、それなりの成果が確実に手に入る。やり抜いた者のみか知る貴重な何かを得ることができる。素質よりも努力のしめる比重が大きく、正直に結果の出るスポーツである。現に、真面目に練習する現役部員は、着実に「力」をつけている。

時代とともにレスリングのルールも変わり、大学でレスリングをする学生の気質も変わるであろう。しかしレスリングが格闘技であり、努力のスポーツであるという事実は変わらない。このことを忘れないかぎり、「関西大学レスリング部の春は遠からじ」と信ずるものである。(昭和56年卒)

関西大学レスリング部コーチ
 関西大学レスリング部監督
 大阪レスリング協会理事
 西日本学生レスリング連盟常任理事
 FILA国際審判員
 (歴任)

◇

状況は関大レスリング部「第2の危機の時代」だともいえる部員不足です。この苦境に際して監督に就任していただいた横山さんに、編集部として、一言のみを申し上げたいものです。ただただ「よろしくお願いします」と。そして「冬の時代」にこそ、「地ならし・土いじり・田おこし」などというすべての基本が必要なのですが、我が仲間がこぞってその任にあたりましょう、と。

(完)



写真▷横山監督(右)・安田コーチ(後列左端)とともに